

阿部 公彦

みなさんはことばのお悩みはないだろうか。私の悩みと言えば、何より「ことばが出てこない」「ことば。いい言い回しがない、名前が出てこない、話が続かない。老化的現象もあるだろうが、人生、いつもことばはなかなか出てこないものだった。そうじゃないですか？

でも、悪いことばかりじゃない。詩はことばが出てこないからこそ生まれるもの。「うくん、何て言うか……」の「……」の部分は詩の宝庫だ。そこにはことばが萌す感じがある。むずむずする。その感覚を何とか形にしたい、とそう思う人が詩を書く。

ただ、詩はわからないなあ、と感じるのもそのせいだ。何しろ、ことばの「萌し」には、唐突な出現がつきもの。よくて冒頭だ。独特な「間」がある。その簡単にわからぬ、と突っばねる。たとえば杉本真維子「桜坂」。「盆に食べる蟹の／つめを渡りたて見ていた／かつてこの鉄でつかんだものが／生き返り、かわりたあなたにはほじりられる」「現代詩手帖」1月号)。「盆」「蟹」……と焦点が定まらず、

やっと「あなた」にたどりつくまでが「苦労」。ことばが喉につかえた感じだ。中原道夫「石の言葉」も、「石」に到達するまでの紆余曲折がくぐもった圧迫を暗示する。「無限の言葉を持っているのにこの世に人が現れてから／石は言葉を発することを／なくしてしまった」(『石の言葉』土曜美術社出版販売)。

ことばがすんなりとは流れない。でも、この硬なさは魅力的な充溢がある。

短歌や俳句では五、七の境に自然と「間」ができる。口語自由詩はそれをやめ、かわりに改行をした。切れ目には余韻や詠嘆が生まれる。ただ、尻尾だけが「間」ではない。ことばと遭遇する頭の「間」こそよっと目をむくのも詩なのだ。今回とくに印象深かったのは秋山洋「雲母橋あたり」(幻戯書房)。「ことばが懐から取り出されるも何だか判然とせず、しかし、語りは歩を進める。呪文のような低い声。「その日がきたら／わたしは橋を渡る／ずっとわたしに尾いてきた／カミノリ堤防のように瘦せた／犬の影も消える」。痺れた。こんなわからぬのは大歓迎だ。

## 独特な「間」に潜む魅力

あべ・まさひこ 1966年、横浜市生まれ。東大文学部准教授(現代英米詩)。「文学をへんくわする」『サンデー』学芸賞。ほかの著書『詩的思考のめくら』など。